
My Spotlight

神無月愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My Spotlight

【Nコード】

N6346Y

【作者名】

神無月愛

【あらすじ】

高校生デビューしたての栄&飛鳥の幼馴染コンビは、期待と不安を胸に私立女子高の演劇部に入部した。キャラの濃すぎる部員や友人達に囲まれたドタバタで愉快的部活ライフ！女ばかりだから恋愛色は無いけれど、こんな青春も良いんじゃない？

他サイトのブログで連載した作品を一部改定、編集したものです。ストーリー大筋は変えていませんが言い回し等はかなり変えてあります。

春 今日、はじまりの風が吹いた

私はたった一人、暗い舞台上に立っていた。

手を前に突き出せば指先が届きそうなほどの位置にある緞帳じゆとけいがするすると上がっていく。それにつられて、私の胸は早鐘のように高鳴る。

頭上のライトが点き、一歩前が眩しいくらい明るくなった。

目の前にある、キラキラ輝く華やかな空間。私は顔を上げ、その中央に一歩踏み出した。――

「さーかーえっ！あれ、寝てる。もう、部活行くよー？」

聞きなれた声が頭上で自分の名前を呼んでいるのが聞こえて、教室で机につつぷして居眠りしていた神谷栄かみやさかえはぼんやりと目を覚ました。午後の教室は日当たりが良く、廊下よりの席でも意外と眩しい。数回瞬きしてみたが、まだ頭が寝ぼけてる。

「まったくもー、部活行くよってば。さっちゃん起きて！おい、栄！」

いらついてきたのかだんだん大きくなる声。栄はゆっくりと頭を持ち上げた。

「何なんだよう……」

「部活初回から遅刻する気なのかっつーのよ莫迦バカ。」

セリフと同時に頭頂部に拳が降ってきて、せつかく持ち上げた頭は机にぶつかってごつんと鈍い音を立てた。

「痛あ！」

「わあ、すごい音。」

栄の悲鳴に、相手は悪びれる様子もなく平然と言う。さすがに堪りかねて、額を押さえてキツと相手の顔を睨んだ。

「何すんだよ飛鳥あすか！」

「あ、起きたあ。」

満面の笑みでそんなことをたまったのは、隣のクラスの西原飛鳥。小動物を思わせる細面な顔に大きめの瞳、小柄で色白、肩にふんわり掛かる黒髪と、少女マンガに出てきそうな可憐で儂げな外見の女の子だ。しかし親しくなればなるほどそんな第一印象と遠ざかっていくような性格の持ち主だった。栄は一度だって飛鳥のことを儂げだなんて思ったことはない。栄と飛鳥は家が隣同士で、物心ついた頃からの幼馴染なのだから。

「ほら行くよ、準備して。大体これから部活行くつてのに本気寝しないよね。」

声も高めで女の子らしい。男になら文句さえも可愛く聞こえるんだろうな、なんてチラツと思った。

栄はそんな幼馴染とはまったく似ていない。そんなに男っぽいという程ではないがショートヘアに太めの眉、太つてもいないが痩せている訳でもなく、顔立ちなどもまあ平凡だと言えた。ただ飛鳥と比較されるのと少々喧嘩っ早い性格の所為で男っぽいなどと言われるのだろう。もともと栄自身、自分を女らしいと思ったことがないのだが。

二人が喋っていると、栄のクラスメイトの一人がひよいと顔を出した。

「あれっ、あーちゃん！えいちゃんと知り合いだったんだ。」

「志茂ちゃん。飛鳥のこと知ってたの？」

栄はちよつと驚いて答える。にっこりと頷いた彼女は、栄の隣の席の志茂安芸子^{あきこ}。高校に入った初日に栄に話し掛けてきてくれた子だった。長い黒髪は綺麗で真っ直ぐで、ふくよかな笑顔はどこか日本人形を思わせる。和服なんか着せたら似合いそうだ。

「安芸ちゃん。そっか、このクラスだったね。」

飛鳥が彼女のほうを振り返った。なんだか妙に楽しそう。そして事情説明を求める栄の視線に気付いて双方に紹介するように言った。

「安芸ちゃんは中学で三年間同じ委員会、栄は幼稚園も小学校も同じ幼馴染なの。すごいなー、お互い知らなかったのに友達になっ

たなんて。なんか縁あるのかもね。」

ふふつと笑う飛鳥。栄はふーんと相槌あいづちだけ打って聞き流した。

「飛鳥、お待たせ。行こつか。志茂ちゃん、また明日ね。」

「うん、私は帰るね。部活がんばって。」

笑顔で手を振る安芸子に見送られて、二人は並んで歩き出した。

部室に向かって歩いていている途中、ちょうど中央階段の近くを通りかかった時だった。

「おーい、栄じゃないか！ 久し振り！」

唐突にそんな大声が聞こえ、振り向く間もなく後ろから抱き付けられた。でも、誰だかは声で分かる。

「か、華奈先輩かな！？」

「おう！ ようこそ宮高みやこうへ！」

キラッキラの明るい笑顔が、かなり高い位置から二人を見下ろしていた。こうしていると、この笑顔が太陽に例えられるのも分かる。

華奈先輩——十条華奈じゅうじょう かなは二人の小学校、栄の中学校の先輩で一つ年上。ちなみに栄は小学生バスケットチームでもお世話になった仲だった。身長160センチ弱ある栄よりさらに20センチばかり高いバスケット部のエースだ。今も宮高バスケット部と書かれたユニフォームに身を包んでいる。宮高というのはここ、私立宮ヶ丘みやがおか女子高校の略称だ。

「わあ、お久し振りです！ 私のことも覚えていらっしやいます？」

「もっちらんよ、飛鳥ちゃんですよ。小学校卒業以来だから、四年ぶり？ 懐かしいなあ。」

そう言って二人の肩を同時に痛いくらいぽんと叩く。

「二人とももう部活決めたでしょ。どこにした？」

「演劇部です、中学と同じく。」

笑顔で答えた栄に華奈はそっか、と呟いた。なんだか妙に嬉しそうだ。

「うわー、楽しみだな。観みに行くからさ。あ、そうだ、部長たちにはもう会ったの？」

「いえ、今日、今から初回なので……」

どうしてそんなコト聞くんだろう、と飛鳥がきよんとして答えると、華奈はいっそうニコニコして言う。

「そうかー、じゃあ会うの楽しみにしてな。あいつらとは知り合いなんだけど、何て言うか、すごい奴らだから。」

いつになくもったいぶって言う。二人が顔を見合わせていると、腕時計をチラッと見た。

「あ、やっべ。部活行かなきゃ。あんた達も遅れないように行けよ。」

そう言って二人が返事する間もなくダッシュで行ってしまった。しはしポカンとした後、二人はやっと我に返って駆け出した。きっと何かが二人を待っている、宮ヶ丘女子高演劇部へ。

春 今日、はじまりの風が吹いた（後書き）

初めまして、綾瀬愛那と申します。

プロローグの段階であとがきというのも変な気はいたしますが、ちよつと書きたいことがあつてペンを取り…いや、キーボードを叩きました。

まず、お読みいただき誠にありがとうございます。なにぶん小説投稿は初心者ですので拙い部分も多々あるとは存じますが、大目に見ていただければ幸いです。

それと、この小説の続きですが、少々お待ちいただく事になるのではないかと先にお断りしておきます。

作者は遅筆で、おまけに学生という身分のため執筆に十分な時間を割けずにあります。これはひとえに私が不器用だという話なのですが、それでも続きを気長に待つてくださる方がいらつしやいましたら作者にとってこれ以上嬉しい事はございません。

では。この栄と飛鳥たちの物語がもしあなたのお気に召しましたなら、またいつかお目にかかりましょう。

第一場 新緑。その中で、小さな波乱の予感がした。

高校校舎と付属中学の校舎の間に挟まれて立つ二階建ての建物、通称部室棟^{ぶしつとう}。高校側の入り口から入って三つ目の部屋、やや色褪せた茶色いドアの前で、二人は足を止めた。目線の高さに掛けられた「演劇部」の札をもう一度確認。一つ大きく深呼吸をしてから、柴はそつとノックする。中から返事が聞こえるのを待って、一息にドアを開けた。

「失礼します！」

中にいた部員七人の視線が一斉に集まるのを感じて、二人ともさすがに怯む。と、奥のほうにいた一人がひらひらと手を振って言った。「あ、新入部員の一年生？まだ部長も副部も来てないから、どうか適当な席に座るときな。」

彼女はどうかやら上級生らしい。ショートヘアで、綺麗なハスキーボイスに口調も男っぽい。男役を演じたらきつと素敵だろう。軽く会釈して近くの席に着いた。すると、やはり奥の方に固まって座っていた上級生の一人が座っている椅子を引きずってやって来た。笑顔で二人に話し掛ける。

「二人は、舞台とか経験あるの？他の一年生の子達は初めてらしいけど。」

この様子だと、全員に聞いて回つたらしい。二人が頷くと、嬉しそうになつこりと笑った。うん、なかなかの美少女。飛鳥よりやや長い——胸くらいまである髪を二つに分けて耳の後ろで結んでいる。しかもショッキングピンクの太ゴムで。派手なヘアアクセサリーは禁止だけどゴムの色まで指定はないから、校則違反ではないけど口うるさい先生だと危ないというギリギリラインか。ささやかなオシヤレだ。とっても女の子らしい。

「よかった、経験者増えて。二年生もあたしともう一人は新人だし、心配だったの。」

それを聞いて栄は改めて周りの部員たちを見回してみた。上履きの色からして、一年生が自分たち含めて5人に二年生が4人で、部長と副部長が来るとしても全部で11人。それに、本来ならまだ引退していない筈の三年生の姿もない。

この部、去年はどうやって活動してたんだろう？ 栄の脳裏に当然とも言える疑問が浮かんだ。

栄が辺りを見回したからだろう、彼女はふと気づいて言った。

「あつ、そうそう。あたし**こまえきょうか** 狛江京花。あの男みたいなのが礼子で、あの子が北沢さん、そんであのちっちゃいのが七波**ななみ**つて言つて、あたしと同じ新人。今いる二年生はこんなもんかな。」

一息で全員分の自己紹介を済ませてしまう。ある意味すごい。指差しただけであの子呼ばわりだった人をまとめると、さっき二人に声をかけた背の高そうなイケメンが礼子先輩、一番窓際の端に座っている超ロング三つ編**み**の美女が北沢先輩、小柄で短めの髪をうなじでしっぽにしているのが七波先輩。私らも一応自己紹介したほうがいいのかな？ と栄と飛鳥が目を見合わせた時、ガラツと勢いよくドアが開いた。

「お待たせー！ 遅くなってごめんね諸君！」

いやに軽い口調でそんなことを言いながら入ってきた二人組。一言でいうと、かなりの美人だった。

二人とも二年生で、おそらくさっき礼子が言っていた部長と副部長だろう。と思つたら即興で作つたらしい紙の名札を着けていた。叫んだのは部長。やや茶つぽい髪は腰まで届くかというほど長い。副部長は漆黒のショートヘアで、一見すると男女ペアのように見えなくもない。ただ、二人とも全く同じと言つていいほどよく似た顔立ちだった。

「遅い。」

礼子のもものすごく不機嫌そうな低い声を軽く無視して、部長は教壇に上つて教卓に両手を置いた。副部長は腕を組んで閉めたドアにもたれ、部室の中を見渡す。

「さて早速だけど、今日は新しく入った一年生に自己紹介でもしてもらおうかなと思います。でもその前に二年生からね。」

部長の言葉で、先にいた4人から順に学年と名前を言っていく。栄達はそれでやっと狛江京花以外のフルネームを知った。相模礼子、北沢奈々、町田七波というらしい。最後に、副部長が部長の隣りに立って口を開く。

「白金月香しろかねつきがです。一年間副部長をやらせてもらうから、よろしく。」

「そして私が、部長の白金雪穂ゆきは。二年生は知ってると思うけど、月香と私は二卵性双生児なの。」

なるほど、道理でそっくりな訳だ。そして部長は何気なくこっちに目を向けた。視線が合ってしまう。

「じゃあ、次は一年生ね。そっちからよろしく。」

そして綺麗にウインクまで投げてよこす。ここまでされてしまったのは断れないので立ち上がり、緊張のあまり声が震えそうになるのを必死に堪えながら自己紹介する。

「一年D組の神谷栄です。よろしくお願いします。」

栄に続いて飛鳥も立ちあがる。こちらは露骨に声が震えてしまっていた。

「C組の西原飛鳥です。よろしくお願いします。」

そして座ってほーっと大きく息をつく。栄はそれを小突き、小声で聞いてやった。

「どうしたんだよ、いつもの舞台度胸はどこ行っただ？」

飛鳥は栄をキッと睨み、さらに小さな声で真剣に言った。

「栄、月香先輩ってすごくカッコいいと思わない？」

「は？」

「立った瞬間、目が合っちゃって。一瞬で頭真っ白になっちゃったの。」

ああそうですか。栄は呆れ返って適当に返事をした。飛鳥が面食いで惚れっぽいのは今始まった事じゃないが、女子中学に行ってからその対象がいつの間にか女性にシフトしているようだ。

二人に続いて、ほかの一年生も緊張しながら自己紹介をしていく。最後に一番端に一人で座っていたポニーテールガールが勢いよく立ち上がった。

「一年A組、戸塚美園とつか みそのです。よろしくお願い致します。」

凜とした声で言い、すくと腰をおろす。その次の瞬間なぜか振り返り、栄と視線が合った。

二人はしばし睨み合う。そのうち、美園はふいと顔をそむけた。

（何なんだよ、今の…）

あまりの鋭い視線に、思わず睨み返してしまった。けど、本当はそこは何事もないような涼しい顔でにこやかに会釈でもすべきだったかも知れない。そう思い当たったのはしばらく後だった。

それに気付いているのかいないのか、部長はちらつとこちらを見ただけで話を続ける。

「これで全部員、11人での活動になります。見ての通り人数は多くないから、一年生も当然舞台に立つてもらうわ。もちろん一番の大舞台は文化祭だけど、その前にも七月公演があるからそのつもりでね。」

先輩のお言葉の間も栄が考え込んでるのが分かったのか、飛鳥がこそつと囁く。

「何してんの？初日からいざこざ起こさないでよね。」

そんなの知らない、あっちが睨んできたんだと言い返そうとしたが、それを無視して飛鳥は前を向いてしまった。栄はふうつとため息をついて、自力で考えを巡らせ始めた。

「戸塚美園？中学三年間同じクラスだったから知ってるけど…あの子、今度は何やらかしたの？」

翌朝一番、栄は入ったばかりの文芸部に提出するための原稿に熱中していた安芸子あきこに声をかけた。美園の名前を出した途端、彼女は露骨にいやな顔をした。

「やらかしたって…問題児か何かなのかよ。」

冗談だろうと思ってなかば呆れたように言う。安芸子は興味なさげに首を振った。

「いや、まあそういう意味で言えば普通の子。」

「じゃあ、どんな子？」

そう尋ねると、安芸子は待ってましたとばかりに一息で言った。

「自己中^{ジコチュウ}で自信過剰で自分は何でも出来ると思ってるバカ。」

「……仲悪かったんだね？」

安芸子はふんと鼻を鳴らして言い足す。

「めちやくちゃ、ね。当然でしょ。あのタイプと私と気が合うと思う？」

「思わない。」

栄は思わず即答する。先日あるクラスメイトに日本人形風美人などと言う変な形容をされていたほど物静かでおしとやかで大人しく見える顔立ち、そして普段はそれに合う笑顔を保えず浮かべている安芸子。しかしやはり人は見かけによらないものらしく、にこやかな仮面の裏にはかなり執念深く腹黒いものがあるというのを栄には仄^{ほの}かに見せるようになっていた。まあそれだけ心を許されているという事だろうか。まだ他のクラスメイトの前では完全に猫かぶったままにいるつもりらしい。今回のキツイ台詞^{せりふ}も、栄にしか聞こえない小声で発されている。

「私は関わり合いにならないように気をつけてたから、積極的に喋った事はないな。……ん？待てよ、本気で口きいた事ないかも。特に用もなかったし。イジメっぽい^{いじめっぽい}のされそうになった事もあったけど、相手にしなかったら向こうが折れた。」

「……。」

さすがは飛鳥の親友だ。真っ先に栄はそんな感想を抱いた。類は友を呼ぶというのは本当らしい。そして、

「やつほー、栄いる？」

なんだか見計らったようなタイミングで教室の入り口に飛鳥がひよいっと顔を出した。まさしく噂をすれば影。二人を見つけてちょ

こちよこと小走りで寄って来る小柄な少女を見て、安芸子がひゅつと口笛を吹いた。

「さすが姫。マンガだったら背景に小花が散ってるね。」

「何言ってるんの安芸ちゃん。」

流石に飛鳥は慣れたもので軽く流す。近くの椅子を勝手に引つ張ってきて、自分の椅子を横に向けた栄と同じように安芸子の席の脇に腰を下ろした。

「で？二人とも、何の話してたの？」

「昨日のアレ。」

栄が一言だけ言うと飛鳥は当然分かったらしい。ただ、ああ、と頷いた。

「戸塚さんね。ねえ安芸ちゃん、あれ何だと思う？」

「何と言われても…私はただ、あの子がどんな子が聞かれただけよ。あいつ何したの？」

困り顔で安芸子が言うと、飛鳥は顔に似合わない事をすらつと答えた。

「簡単に言うと、ガン飛ばしてきた。」

「ほんとに顔と台詞の噛み合わない娘だなこいつは…」

栄は呆れて聞こえないような声で呟く。これこそ、人は見かけによらないの具体例。小さい頃から小柄で可愛らしく弱々しい外見だった所為で苛められた事も多いものの、お陰で慣れてしまったのかイジメを上手くあしらうスキルを身に付けている。安芸子から聞いた話では、中一の時苛めようとした相手を返り討ちにしたらしい。どんな手段でかは知らないし、知りたくもないけど。

栄の台詞が聞こえなかった筈はないが軽く無視して、飛鳥は安芸子の顔を覗き込んで少々わざとらしく小首を傾げてみせる。安芸子は妙に納得顔で頷いた。

「なあるほど。まあそんなこつたろうとは思ってたけどさ。で、その視線の先にいたのはどつちよ？」

「私だけど…」

栄がおずおずと答える。と、安芸子はぴくつと眉をあげた。

「え、そうなの？ そりゃ意外だ。あーちゃんだと思ってたのに。あの子、いつの間にキャラ変える気になったのかしら？」

「どういう事？」

今度は本当に意味が分からなかったらしく、素^すできよんとした飛鳥。安芸子はそれをまっすぐ見つめて訳知り顔で説明を始める。

「あーちゃん、あの子が中学でダンス部に入ってたのは知ってるよね？」

「うん。」

「あの子の目指すのってどっちかってとアイドル路線、可愛い方向だったみたいなのよ。何て言うかさあ、うちの学校じゃ浮くくらい『今ドキ！』って感じのかわいい子ぶった格好してたじゃない。ダンス部の中でも特に。だから、ライバル視するならあーちゃんかなあと思っただ訳。」

一瞬、栄と飛鳥は何の事かと互いの顔を見合わせ、同時に安芸子へ向き直った。

「何でわたし？ わたし別に可愛い子キャラ狙ってないわよ？」

「いやいやいや、何でアイドル目指して飛鳥がライバルなんだよ。」

飛鳥と栄が同時にツッコむ。安芸子は呆れ返ったように二人を交互に見、肩をすくめた。

「これだからこの幼馴染^{おさななじみ}コンビは…何も分かってないね。本人がどう思ってるかなんかこの場合問題じゃないの、あっちが勝手に思い込んでるだけなんだから。それにね、いい？ あーちゃんほか・わ・い・い・の！ あーちゃん、自覚してないとは言わせないし謙遜も無用よ。」

飛鳥が口を挟むより早く手と言葉でそれを制する。伊達^{だて}に三年間一緒にいた訳じゃないらしいな、扱いが手馴れている。押し黙った飛鳥に満足したのか、安芸子は背もたれに寄りかかって独り言のような調子で言った。

「あの子もなあ、どうしてこの学校に来たのかなあ。そもそもあん

な性格だと女子校に来たのが間違いの元、ってか悲劇の始まりだったって気もしたんだけどねー。」

それはそうかも知れない。栄も飛鳥も頷いた。と、安芸子は急に我に返ったようにハツとした。

「つと、違う違う。今の問題はそれじゃないんだ、相手はあーちゃんじゃなくてえいちゃんなんだから。ま、それならそれで問題ない気もするけどね。えいちゃんてば素直にイジメられる様な奴じゃないし、それ以前に鈍そうだし。」

「あのな。」

「あーちゃんも気を付けなよ？ セットで見られたらとばっちり食らうかも。」

「わたし？」

飛鳥はきよんとする。今度のはちよつとわざとらしい。そして、飛鳥はにつこりといやに力を込めた笑顔で言った。

「あら、わたしなら大丈夫よお。打たれ強いもん。経験値あるしね。」

「…あつそう。」

その言葉は確かに本当なので、安芸子も栄も何も言えなくなる。その時ちよつどチャイムが鳴って、飛鳥は立ち上がると大げさなほど優雅にお辞儀をして隣の教室へ帰っていった。

第二場　五月晴れ。さいしょの一步をふみ出す時。

部活動が出来なくなる中間テスト前、最後の部活の日のこと。部長が持ち込んだダンスのCDを使つての柔軟と、窓を開けて発声といういつもの基礎練習メニューを終えた頃、部室のドアがこんこんと叩かれた。部員は全員揃っているし……誰だろう？　部長には分かっているようで、なぜか嬉しそうに顔を輝かせる。

「ハイ、どうぞ。入って入って！」

「開ーけーてーくーれー！　両手塞がつてるの！」

聞き覚えのない女らしい声。礼子が素早く行つてドアを開ける。そこには、その言葉通り両手で紙の束を抱えた女子生徒が立っていた。さっきのノックはつま先でドアを軽く蹴飛ばした音だったようだ。

二年生だし、先輩たちは全員顔見知りらしい。勝手知つたる様子で部室に入ってくると、持っていたものを手近な机にどさりと置いた。

「あー肩凝つた。」

「お疲れさまー。よかったわ間に合つて。」

大きく伸びをする彼女の背を、雪穂があつうようにぽんぽんと叩く。そしてやっと、一年生達に状況が分かつてないのに気が付いたらしい。

「そっか、みんなは初対面だったね。こちら、私の友達のいわぶち えみ。文芸部の子んだけど、今回の台本をお願いしたの。」

「初めまして。」

紹介されてぺこりと頭を下げる眼鏡少女。隣りに立つ雪穂や奈々と比べてしまう所為か美人とは言い難かったが、笑うとふっくりした頬にえくぼが浮かび、なんとも優しい雰囲気をかもし出す。可愛らしいのとは違う、大人っぽい笑顔。お母さんのような、という例えが似合う。眼鏡の奥で瞳がきらつと光った。

「なんか有望そうな後輩達ね、雪ちゃん。私、脚本書いたの初めてだからとっても楽しみなの。」

楽しそうに言う。ちよつと季節外れだけど、例えるなら大輪のひまわり。部員達が各々一冊ずつ台本を取って中に目を通しているのを眺めている。栄と飛鳥もドキドキしながら手に取った。思ったより分厚く、ずっしりとして感じる。表紙に書かれたタイトルを、七波が声に出して呟いた。

「えいきゆうのつばさ?」

「マッチー、それ、永久とわの翼つばなって読むんだよ。T o w a ' s w i n g s って書いてあるのは何の為だと…」

すかさず突っ込むのは作者の笑実ではなく月香副部長。演出として脚本に関わっているという。

「…分かった。ところで、そのマッチーっていうのやめてくれない?」

七波は苦り切った顔で言うが、期待はしてなさそうだ。そして返ってきた答えもその予想通りだった。

「やだ。だって‘なな’と‘ななみ’と二人いるとややこしいじゃないか。」

確かにもっともな意見なので、マッチーこと町田七波もそれ以上文句は言わない。最近では後輩達にも「マチ先輩」と呼ばれるようになってしまい、諦め顔だった。さっきのツッコミだってほぼ形だけだ。

と、変な方向に話がずれて和んだ雰囲気雪穂がいきなり現実引き戻した。

「台本も出来上がった事だし、今週中に役の希望出してテスト明け第一回到オーディションしよう。」

「ええー!?!」

愕然とした部員達。今日は木曜日。で、定期テストが再来週の水曜に終わるから次の部活は木曜日。つまり、テスト後は練習する時間が殆どないことになる。

「聞いてないよ、そんな急な話!」

京花の半泣き声での抗議は、

「だって言ってなかったもの。」

雪穂の台詞に無残に打ち砕かれた。確かにそうだが、あんまりだ。
「とりあえず土曜日までに、何かの紙に希望する役一つ書いて雪穂が俺に出すように。あ、ちなみに雪はA組、俺はB組な。」

部長の言葉に動じなかったのはこの人くらいだろう。月香はてきぱきと必要事項だけを連絡する。まだ新入部員の誰もが具体的に考えていなかった初舞台が、急に現実味を帯びる。京花や七波はまだぶつぶつ言っていたが、完全に黙殺された。

栄は手にした台本の表紙をめくった。1ページ目には役名と簡単な説明の一覧。キャストはきっちり部員数と同じ11人だ。

「キャスト表に書いてある順番は、そのまま登場人物の重要度だと思ってもらって構わないわ。舞台経験ある人は出来ればチャレンジする方向で行ってほしいな。もちろんやる気があれば誰でも構わないし、先輩後輩遠慮は無用よ。」

につこりと雪穂が言った時、ちょうど部活動終了時間のチャイムが鳴った。それぞれ三々五々（と言うほどの大人数でもないが）帰っていく中で、美園がいつまでもキャスト表を見つめて考え込んでいたのが少々気にならなくもなかった。

土曜日の夕方。栄は自分の部屋のベッドに寝転んで台本を読み耽っていた。

主人公は高校生の少年・蓮^{れん}。簡単にいうと彼が感情を持たない死神の少女に出会い、彼女は蓮と触れ合ううちに彼に恋するようになるというストーリーだ。多少セリフや出番の数に差があるのは当り前の事だけれど、際立って少なすぎる登場人物はいない。改めてキャストを11人きっちり揃えた先輩は凄いなあと栄は感心した。

栄が希望したのは、主人公の蓮役。先輩にもああ言われた事だし、と思い切って書いてしまったのだ。やりたい気持ちは本当に大きいし、中学の頃から男役が多かった事もあって男だから難しいとは思わなかった。でもこうして読んでみると、本当に出番も台詞もかな

り多い。もう一人の主役と言える死神の少女、トワほどではないが演技の面でも難しい役だ。栄は、蓮の台詞のひとつを声に出して咳いた。

「俺は、トワが好きだよ。最初に会った時からずっと。俺はこいつを守る。そのためなら、俺は例えお前だって敵にまわしてやるさ。」

恋する少女を守るうとする主人公の言葉。彼のセリフの中で、栄が一番好きなものだ。このとき対峙する相手は、きっと先輩だろう。

これも難しい役だから。けれど、それで怯むつもりはない。全体を通して読んでもう一度、蓮を演じたい気持ちを再確認した頃、枕の脇に置いてあった携帯電話が鳴った。飛鳥だ。

『もしもし、栄？ 今何してる？』

「台本読んでたところ。そっちは？」

『同じよ。ところで栄、あんたいい加減どの役を希望したのか白状しなさいよね。』

言葉に詰まった。

一緒に出しに行った飛鳥にも偶然会った他の部員にも何を希望したか聞かれたのだが、誰にも何役を希望したか言わなかったのだ。主役がやりたいと言うと、やっぱり少し自惚れてるように自分でも思えたから。しかし飛鳥は、栄や同級生に聞かれるとあっさり蓮の彼女・早苗役を希望したと答えた。

「早苗って……いいのお？ 前半で死んじゃう役じゃない。」

早苗は幼いころから病気で、真ん中あたりのシーンで命を落とす。

その後全く出ない訳ではないが、どうしても出番も台詞もやや少ないのだ。同じく演劇部の一年生である梅島梨絵にそう聞かれた時、飛鳥はにつこりして答えた。

「うん、でもやりたいんだ。大事な役だし、あらずじ読んで、とっても惹かれたの。」

飛鳥のその気持ちも分からなくない。早苗の朗らかでいて陰のある、儂い小花のような明るさはどこか惹かれる所がある。自分の命がそう長くない事を知っているからこそその輝きなのかも知れない。

当然その時、飛鳥や梨絵たちは栄も言うようにと迫って来た。が、どうにも恥ずかしくて言えなかったのだ。栄はそつと聞いてみた。

「…笑わない？」

「笑わないよ。」

電話の向こうの飛鳥の声が真面目にそう言ったので、栄はやつとその役名を口にした。

「蓮…だけど、やっぱり自信ないよ。」

「何言ってるのよ莫迦。」

ため息とともに吐き出した言葉を、飛鳥はぴしやりと否定した。

『中学で主役やった事だつてあつたでしょ？一年生とは言え経験者なのよ。自信持ちなさいって。』

確かに言われてみればそうだ。栄が中学の文化祭で主役を演じた時、飛鳥はちゃんと観に来てくれた。逆に栄も飛鳥の舞台は学校部外者でも可能な限り全部観ている。もしかしたらこういう事に関しては姉妹よりも近い間柄かも知れない。

「ありがと飛鳥。なんか、今の言い方姉ちゃんみたい。」

栄はそう言つて、くすつと笑つた。飛鳥も笑っているのが聞こえる。『困った奴。ちびの頃は末っ子役だったわたしが世話焼かないといけないなんて。ま、希望通りになるかは分かんないけどさ、頑張ろうよ。』

「お互いにな。おやすみ、早苗。」

わざとまだ決まっていな役名で呼んで、飛鳥が何か言うより前にさつさと電話を切つた。ごろりとベッドに寝転ぶと、台本を胸に抱えて目を閉じる。七月公演——高校の初舞台まで、あと二ヶ月ほど。はやる気持ちは抑え切れないけど、何が起こるかなんてまだ分からない。そつ、誰にも。

オーディションの日はあつと言う間にやって来た。

部室で待機している中、一人ずつ近くの空き教室に呼ばれて面接という形だった。終わった人が次に指名された人を呼ぶ。それに特に

規則性はないようで、いつ呼ばれるか全く予測が出来ずかなり緊張する。何番目かに飛鳥が呼ばれてから、栄は緊張を紛らわそうともう一度台本に目を通していた。

「栄ちゃん、どうしよう、緊張すぎて心臓が痛いよう。」

そんな風に話し掛けて来たのは、同じ一年生の梨絵。黒々した真っ直ぐな髪をちょうど肩の辺りで切りそろえた彼女は、いつも明るいい顔に泣き笑いのような情けない表情を浮かべている。ちょっと後ろを振り返って、いつも一緒にいるクラスメイトを目線で指して言った。

「沙矢^{みさ}たんはもう終わったんだって。ねえ、栄ちゃんって舞台経験あるんでしょ？中学の時はどんな感じだった？」

「沙矢たん」とは、彼女が指した小菅^{こすげ}沙矢子の事だ。確かに沙矢子はおうりラックスした表情で、劇とは全く関係ない何か文庫本を読んでいる。栄は梨絵に向かって答えた。

「確かに中学の頃やってたけど、役決める人によってこういう時間く事は違うもん。私に言えるのは、希望する役の重要そうな台詞は練習しとくと良いよって事くらいかな。」

「そっかあ。」

まだ不安そうだ。気持ちは分かるから、栄はちよつと苦笑いして付け加えた。

「どんな質問されたかなら、終わった人に聞いた方がいいと思うよ。」

「そうだね。ありがとう。よし、沙矢たんに聞いてみる。」

梨絵がちよつと笑ってそう言った時、部室のドアがガラッと開いた。まだ終わっていない栄と梨絵、それにあと数人は思わず身を固くする。

「終わりましたー。栄、次来てって。」

安堵からか少し笑いを含んだような飛鳥の声が、部室に響いた。

「失礼します、神谷です。」

中から雪穂がどうぞと答える声を聞いてから、栄は思い切つて一息に教室のドアを開けた。窓を背景に机が四つ。そこに、それぞれタ イプの全く違う四人の女性が並んで座っていた。

右から二人は当然、部長と副部長。この二人が並んでいるのを見て、不意に脳裏に子どもの頃読んだ絵本のお姫様と王子様のイメージが浮かんだ。高貴な雰囲気を感じさせる、何ともいえない威厳。後光が射して見える気がするのは決して窓の外が晴れてるからだけではなからう。

その隣りにいるのは岩淵笑実。ふんわりとした聖母のような微笑を浮かべている彼女は演劇部員ではないが、今回の脚本を書いたのだからオーディションに関わるのは当然である。

そしてラスト、四人目。一番端にいたのは、栄が今まで一度も部活で顔を見ていない人物だった。

彼女のクラスの英語教師、川崎縁^{かわさきゆかり}。

もちろん栄だって、川崎先生が演劇部の顧問である事を知らなかった訳ではない。けど今まで活動に顔を出した事もなかったし、他の多くの部活の顧問と同じように活動にはあまり関わらない人かと思っていたのだ。若くはないが色白の美人で、きゅっと引き締まった顔は一見年齢を感じさせない。豊かに流れるふわふわとした茶色つばい髪はどこか百獣の王を連想させる。授業中も普段も特に態度などに厳しいと有名だが、怖い訳ではなくとても優しいので生徒からの人気は高い先生だ。

錚錚^{そうそう}たる面々を前に、栄は緊張で完全に固くなってしまう。まず雪穂が口を開いた。

「神谷さんは、蓮役の希望だったわね？」

何も言えず、ただ頷く。この役を希望した理由などいくつかありきなどの質問をされた後、いくつか蓮の台詞に加えその友人達の台詞も読まされた。もちろん希望の役じゃなくなつて必死で演じる。じやあ最後に、と笑実が栄の目を真っ直ぐに見て尋ねた。

「そうね、例えばの話。蓮じゃないとしたらどの役を演じたい、な

んて考えはある？」

栄は不意を衝かれてしばし考え込み、でも思い切って正直に言った。
「いえ…考えてませんでした。でも、蓮じゃなくても決まった役は精一杯やりたいと思います。」

その答えに満足だったのか、笑実嬉しそうになっこりする。部屋に戻ったら奈々ちゃん呼んでねー、という副部長の声を聞きつつ、栄は最後に一礼してオーディション会場を後にした。

「怖い。なんかテスト返却の時みたいな気分。」

「え？」

栄がそんなことを呟いた沙矢子の方を振り返ると、机に身を投げ出していた彼女は同じように変な顔をしている梨絵にも説明するように言った。

「返って来る事とはつくに分かってるし来なきゃ困るんだけど、やっぱり結果見るのが怖いなって。」

今日はオーディションの結果発表の日。みんな表面上はいつもと変わらない様に見えるが、どことなくピリピリした空気が漂ってる。

京花なんて、さっきからドアの音がするたびにビクついていた。

あーもう沙矢たんがそんな事言うから余計怖くなっちゃったじゃん！なんて梨絵が叫んだ時、ガラスと部屋のドアが勢いよく開いて、部長が月香と笑実を従えて入ってきた。

「お待たせーっ、さあいよいよ配役発表しちゃうよん。」

楽しそうに言う彼女とぎゃーっと悲鳴のような声を上げる部員達の様子は、確かにテスト返却時の教室の様子に似ている。笑実がいやにニコニコしながら手に持っている紙を開く。

「よーし、まず最初に、主役から！トワ役は……」

彼女は一度口を閉じ、みんなの顔を見回す。居心地が悪いほどの静寂。ぴっと空気が張り詰め、グラウンドなどから聞こえる他の部活の喧騒も遠くにしか聞こえない。たっぷり5秒は溜めてから、その口からヒロインの名前が告げられた。

「…北沢奈々！」

——え？

部室のどこからそんな声が上がった。恐らくそんな気がただけだろう。でも、心のどこかでこの難しい主役は部長が演じるに違いないと思い込んでいたのは栄だけではない筈だ。現に一番驚いているのは、名前を呼ばれた奈々自身であるように思えた。彼女は普段ほとんど感情を表に出さないタイプなのだが、瞳を大きく見開いて両手で口を押さえている。

一瞬の静寂。その後、誰からともなく拍手が上がった。部室が暖かい拍手で満たされ、奈々はゆっくり立ち上がって頭を下げ、消え入りそうな声で言った。

「ありがとうございます。よろしく願います。」

拍手が自然に止むのを待ち、笑実先輩が再び口を開く。次に発表されるのは当然、もう一人の主役といえる蓮だろう。栄は緊張に身をこわばらせ、祈るような気持ちでその瞬間を待った。

第三場 梅雨 曲がりくねった道を。

「次に、蓮役^{れん}は……」

部員に比べれば通るとはいえない笑実^{えみ}の細い声も、静まり返った今の部室には凜と響く。お願い、私の名前を……でもここで決まったら後戻りは出来ない。主役になりたい気持ちと別の人に決まって欲しい気持ちが土壇場のここまで来て入り乱れ、緊張は最高潮に達する名前が読み上げられるまでのほんの短い時間が、まるでスライムの中でも動いてるように妙にのつてりと遅く感じられた。

「相模礼子^{さがみ}！」

栄の中の時間が、止まった。

（私じゃ……ない？私、主役じゃないんだ……。）

何だか実感のない頭でただそんなことを思う。みんなにつられるように先輩に拍手を贈りながら、その恥ずかしそうな笑顔をぼんやりと眺めた。

（相模先輩が蓮かあ。いいじゃない。格好良いし、背高いし、素敵だし、似合う。ははっ、何だろ、全然悔しくないや。）

そう思った時、主役にならなくてホッとしている自分にようやく気付いた。急に恥ずかしくなる。

（うわ……こんな、決まらなくて安心するような覚悟だった？ダメだな。こんなでもし決まっちゃってたら、先輩方に申し訳かった。）

栄が一人でそんな事を考えてる間も、配役の発表はどんどん進む。

飛鳥は希望通り早苗役^{さなえ}に決まり、頬をほんのり上気させているのが見える。栄も間もなく名前を呼ばれ、蓮の友達^{ともだち}の一人である爽太^{そうた}の役に決まった。最後に部長が、改めてみんな頑張ろう！と笑顔で激励の言葉を述べる。

「オーディションが結構急だった事から察している子もいると思うけど、七月公演までは本当に日が無いの。のんびりしてる暇なんてないから、すぐ立ち稽古^{げいこ}に入ります。特に主役・準主役になった人、

いつまでも台詞が言えないようなら途中からでも役変えるわよ。」
その瞳の冷静さと真剣さが、これが脅しでも何でもなく本気だという事を示している。礼子が大げさだと言うようにちよつと肩をすくめてみせるが、その瞬間軽く睨まれた。

そしてその日の後半の活動は、次の活動から立ち稽古に入るための準備。具体的に言うシーンごとの話し合いだ。立ち位置や台詞のタイミング、ほしい小道具など大まかに決めてしまう。早いようだけど、公演の日まで2ヶ月ないのだから。

「先輩、ちよつといいですか？」

早苗の出る最後のシーンの話になった時、飛鳥がおずおずと言った。
「ん、なにになに？」

雪穂が妙に楽しそうに聞き返す。この様子では、きつと用件を察してるに違いない。飛鳥にしては珍しくもごもごと言い難そうにしていると、沙矢子がそれを見つけて呟いた。

「あ。キスシーン発見。」

飛鳥はぎゃあつと小さく悲鳴をあげて赤くなってしまう。栄も台本に目を落としてその場面を見た。相手は当然ながら蓮だから、先輩とという事になる。相手が私だったらここまで過剰に反応したかなあ、なんて栄が苦笑していると、礼子はぱらぱらとページをめくって事も無げに言った。

「ん？ああ、これが。大丈夫だよ。」

そしていきなり、飛鳥の後頭部をつかんで引き寄せた。

「ひゃああつ！？」

飛鳥が変な悲鳴を上げ、先輩はそこでぴたりと止める。本当に寸止めといった感じで、顔と顔の間は10センチほどしか離れていない。「このくらいで暗転するから。あ、もしかして初めて？」

顔を真っ赤にし、体を固くしてこくこくと頷く飛鳥。何だか小さくふるふる震えている。その様子を見て礼子は笑顔を見せ、顔を離して後輩の頭をぽんぽんと撫で、芝居がかった調子で言った。

「ふつ、可愛い奴。」

すっぱーん。その台詞が飛鳥のハートにクリーンヒットした音が、もちろん錯覚だけど聞こえた気がした。栄は呆れながら、気絶寸前の飛鳥の背中を支えつつ後頭部をひっぱたいて呟く。

「莫迦。」

それにしても、飛鳥がキスシーンやったこと無かったとは。栄にとってみれば結構意外だった。栄は一応一回だけ女の子と顔スレスレを経験した。もっとも相手は同級生だったが。

「相模ちゃーん。だめよお、後輩で遊んじゃ。知ってる？あんたフアン多いんだよ。」

ニヤニヤしつつ言う京花に、礼子は馬鹿馬鹿しいと肩だけすくめてみせた。それからふと何か思い出したように栄を見て、言った。

「神谷ちゃん、ゴメンね。」

「はい？何がですか？」

彼女はきょとんとする栄にウィンクして、一言。

「この子の——飛鳥ちゃんの隣のポジション取っちゃって。」

一瞬、言葉の意味が分からなかった。先輩の楽しそうな笑顔をしばしポカンと莫迦みたいに眺めてやっと冗談を言われたんだと了解し、慌てて同じノリで返す。

「え？あ、いやっ、別にそんなんじゃないですから！飛鳥なんかで良ければどうぞどうぞ！」

「さりげなく幼馴染に対してド失礼な事言ってるじゃないわよ莫迦。」

あつと言う間に放心状態から復活した飛鳥の鉄拳（手加減アリ）を後頭部に喰らう。部室内のどこからともなくすくす笑いが起こり、やがて全員に広まった。飛鳥も笑っているし、栄も仕方なく照れたように笑う。慌ただしかった部室内の空気が、一気に緩んだ。

栄の美園への感情が微妙に動いたのは、立ち稽古が始まって間もなくの事だった。

間抜けにも部室に忘れ物をした栄。飛鳥に「ほらほら、ちょっとな

ら待つててあげるからとつておいで」と妙に上から目線で言われたので待たせては悪い——いや、どんな目に遭うか判らないと廊下を走っていた。部室のドアに手を伸ばした瞬間、

「何か、私に言いたい事があるんじゃない？」

雪穂部長のやわらかい、しかし強い調子の声が聞こえて、思わず手が止まった。

「いいのよ、遠慮しないで。と言うより教えてほしいの。不満を全て無くすことまでは出来ないかも知れないけど、努力だけはしたいから。」

さつきよりさらに優しい声で彼女は言う。と、それに答えるふてくされた声が小さく聞こえた。

「別に、良いんです。今さら変わりませんから。」

栄ははつとした。その声は間違えようもなく、あの戸塚美園のものだった。そう言えば、さつき帰る間際に雪穂が美園に声をかけていたのを思い出した。

「でも、あなたは納得してない。おそらく配役に。そうでしょう？」

「…どうして、判るんですか？」

美園のいぶかしげな問いに答える雪穂の言葉は妙にあっけらかんとしていた。

「だって、由依^{ゆい}になりきれていない、ううん、なりきろうともしていないんだもの。」

「えっ……」

由依は蓮の妹、美園の役名だ。美園は驚いて、少し怒ったように言う。

「そんな…あたしの演技が、不真面目だって言うんですか？」

「違うの、そういう事じゃない。」

一言で否定された。

「演技は頑張ってる。舞台に立つのは初めてだって言ってたけど、それにしても良くやっているとと思うわ。でもね、」

雪穂は一回言葉を切り、ゆっくりと言い聞かせるように言った。

「気持ち、よ。まだ、由依」というキャラクターの心を掴みきれてない。彼女と共鳴できてないの。それは多分、由依を演じる事を心から楽しめてないから。」

「……。」

「あなたが早苗を希望してて、その役になれなかったから？」

少し間が空く。やがて美園は言った。

「そう……ですね。そうかも知れません。あたしは、早苗になりたかったんです。先輩、あたしに早苗は出来ませんか？」

どこか思いつめた声のようにも聞こえた。雪穂は軽く息を吐いて答える。

「そうね、出来ないとは思わないわ。でも、西原さんの方がより相応しいとしか言いようがないわね。」

美園ががっくりするのが雰囲気だけで感じられた。でもね、と彼女は続ける。

「今回、早苗を希望したのはあなた達二人。蓮役の希望が三人、トワ役の希望が二人。この意味分かるよね？」

「……はい。」

厳しく戒めるような口調に、美園はしゅんとしてしまう。先輩は今度は優しく言った。

「由依は、明るいように見えて心に影を持った子なの。今までお互い唯一無二の存在だった兄に恋人が出来て、自分をあまり構ってくられなくなってしまう。嫉妬しようにも、その相手は自分の友達。」

「いい子」の由依には恨む事など出来ない。きつと苦しいでしょうね。」

「」

「……。」

「どうにも出来ずにぎこちないまま、彼女は死んでしまう。相手に自分の気持ちを打ち明ける事も出来ず、曖昧なまま。由依はどう思ってたかしら？」

美園は考え込む。そして言葉を慎重に選びながら言った。

「きつと、あたしなら、自己嫌悪したんじゃないかと思います。も

つと早く自分の気持ちを言っておけば、こんな後味の悪さは残らなかったって。あつ……」

はつとして、美園は彼女を見下ろしている先輩の笑顔を見上げた。

「もしかして、これ…今日声をかけてくださったのも、このためですか？」

「あなたなら、きっと彼女の心を分かってくれると思った。少し、近い部分を持つてるから。由依はそれほど重要なキャラクターではないけれど、わだかまりを隠した難しい役なの。それをあなたは託されたのよ。胸を張って頑張りなさい。」

「はい！」

栄は会話にすっかり聞き入っていた。そして、入部して一月も経たないのに既に一年生の、中でもあまり喋らないような美園の内面を部長が見抜いている事を知り、舌を巻いた。配役もオーディションだけで決めた訳ではなさそうだし、栄が主役を希望しながらも不安だった事までお見通しだったのではないかとすら思えてくる。

栄がドアの外で色々考えを巡らしていると、そんなことを知る由も無い美園の声が聞こえた。

「先輩は、あたしの母をご存知なんですか？」

母？ 栄には何の事だかわからない。雪穂の答えに、余計混乱した。

「まあね、同業者だから。」

どうぎょうしゃ？ その言葉の意味を栄が考える間もなく、突然、後ろから抱き付かれた。

「！？」

思わず声を上げそうになったが、驚きすぎて声が出ない。パニックを起こしかけたまま、ずるずると後ろに引きずられていく。そして、栄を羽交い締めにした人物はその耳元で囁いた。

「立ち聞きとは感心しないね、爽太。」

聞き覚えがあるところではない、ついさっきまで会話していた声。栄は何とか気持ちを落ち着けてその名を口にした。

「月…じゃなかった。光^{ひかる}せんば」

「その名前で呼ぶ時は、‘先輩’も無しな。役の上では同級生なんだから。」

副部長は栄の肩をがっちりと拘束していた手を放して言う。まったく、部活関係の時は役名で呼び合うなんてルール、一体誰が作り出したんだろうと栄は思った。冗談半分なのか真面目なのかも分からない。蓮や爽太の友人・光役の月香はやれやれと言うように肩をすくめ、手に持っていたものを差し出した。

「ほら、忘れ物。探してたんだぞ。」

「あつ、すみません！ありがとうございます！」

ポーチを受け取って頭を下げる。気を付けろよ、と笑う先輩の顔が何故か少し寂しそうで、栄は不思議に思った。が、深く考えてる暇はなかった。

「ああ。そう言えば、飛鳥ちゃん待ってたぞ。行き違いになりましたって、教えてくれた。早く戻ってあげな。」

「あつ！」

怒り顔の飛鳥とその文句の嵐を想像して、栄は若干青くなった。月香にもう一度お礼を言って、慌てて駆け出す。ジュースの一本くらい奢らされるだろうなと思いながら。

「じゃあ、あたしはここで。また明日ね、蓮くん。」

「ああ、気をつけて帰れよ。」

ボーイフレンドに手を振り、明るい笑顔で駆けて行く早苗。少年も笑顔で手を振りながら、そんな彼女の後姿を見送っていた。

と、その手の動きが不意に止まる。一人の少女が早苗をじっと目で追うのを見たからだ。

彼女は艶やかに長い黒髪をなびかせ、堀の上に腰掛けている。年はおそらく彼らと同じくらいといったところか。だがその整った顔は無表情で瞳は冷たく、明らかに普通の女の子ではなさそうだと感じられた。そしてその白い手に握られている物は……

「あの鎌って……まさか、死神？」

彼女の身長ほどもありそうな、光を浴びて鈍く鈍色に輝く大鎌。蓮は自分が見たものが信じられないように顔をしかめる。そんな彼の呟きが聞こえた筈もないのだが、少女が不意にこちらを振り向いた。二人の視線が合う。その時、

「おつす、蓮。」

「何だ何だ、早苗ちゃんの後姿にでも見とれてんのか？ いいよな、あの娘。」

そんな言葉が聞こえて振り向く間もなく背中をど突かれ、蓮は前のめりにコケてしまった。

「痛っ！…なんだ、お前らか。爽太、光。」

振り向かなくなつたって声で分かる、二人の親友もとい悪友。というよりこーゆー餓鬼^{ガキ}っぽい莫迦^{バカ}をするのはこいつらしいかない。まあ高校生男子なんてこんなものだ。蓮はど突かれたあたりを軽くさすりつつ、今一番の関心事に意識を戻した。あの子は、まだ同じところにいる。

「なあ、あの子…なんであんな所にいるんだろうな？」

そちらを指差し、そして初めて二人の方を振り返った。すると、二人とも怪訝な顔で視線を泳がせている。

「あの子って、何の事だ？ 誰もいないぞ。」

爽太の言葉に蓮は驚いて、急いで再びそちらを見る。まさか幽霊のように消えてしまったのか？とも思ったが、彼女は変わらず同じ位置に腰掛けている。蓮は混乱してきた。

「は？ 何言ってるんだ。見えないのか？ ほら、あそこの塀の上……っ！」

全て言い切る前に、蓮はふとして言葉を切った。まさか、彼女は自分には見えないのか？ どうやらその通りらしい。光は呆れたように、爽太は本気で心配したように言った。

「おいおい蓮、どうしちゃったんだよ。いきなりお前まで八重^{やえ}みたいなこと言わないでくれよ。」

「蓮、お前ひょっとして疲れてないか？ お前がそんなこと言い出す

と心配になつてくるよ。」

八重とは、三人と同じクラスの靈感少女だ。蓮は二人の言葉に少し哑然とするが、からかわれるのも心配されるのも嫌だった。なので、ぎこちなく誤魔化すように後ろ頭を掻いて首をひねる。

「何：だろうな、見間違えかな。ところで何か用か？」

むりやり話題を変える。二人ともまだ何か釈然としないようだったが、その時小柄な少年が駆けて来て、明るく三人を呼ぶ声がした。

「先輩っ！置いてきぼりなんてヒドイじゃないですか！」

「ははっ、悪い悪い。そんな拗^すねてんじゃねえよ、康平^{こうへい}。」

光は駆け寄ってきた後輩の頭をぽんぽんと撫でる。康平は仏頂面でその手を避けた。

「別に拗ねてませんよっ。ガキ扱いしないでください。」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ康平はよけい子供っぽく見える。ただ、それをあしらう光も同じノリで、二人は苦笑するしかない。

「なに二人してじゃれてんだよ。行くぞ。」

爽太が笑いながら言い、四人は賑やかに喋りながら歩いていく。そんな中、蓮は一度だけあの子の方を振り向いた。大鎌、白い肌、無表情な瞳。さつきと変わらぬ冷たい姿が、そこにあった。ほんの一瞬、視線が合う。

「おい、蓮？早く来いよー」

先を歩いていた光が大声で彼を呼んだ。

「あ、ああ。今行く。」

彼女を見ていたかったけれど……蓮はそれを振り切つて、友人達のあとを追つて駆け出した。

一人残された少女は、手に鎌を持ったままふわっと地面に飛び降りる。少年達が去って行った方を見つめ、ほんのわずかに眉をしかめた。

「彼、あたしが見えるんだ。珍しい。」

呟くと、そのまま大して気にも留めない様子でそちらに背を向け――

「よし、OK！」

雪穂部長の凜とした声が部室に響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6346y/>

My Spotlight

2011年12月15日18時48分発行